

優秀な学生の
俺たちにも経営は
分からない

道化童子

イラスト/神名あやる

他人の代表



<http://www.tanin.jp/>



優秀な学生の
俺たちにも経営は
分からない

「社長、萬院ホールディングスから衛藤専務が参られました」

社長秘書と思われる女性が社長室のドアを開ける。

「通して」

中から若い女の声が聞こえてくる。

俺たちは秘書に案内されるまま、社長室に入る。似つかわしくない格好をしている俺や雲英みたいな若造がここに乗りこむには少し勇気が必要だった。

社長室は地上三十階にあり、大きな窓からこの街がよく見えた。

その隅にある大きな机。

そこに座っているのは、俺や雲英よりもその場に似つかわしくない少女だった。

いや、背も女にしては高いし、スレンダーな姿は雲英よりも大人びて見える。

だが、その恰好は学生のそれそのものだった。まずロングツインテールという髪形が許されるのは、まあ、アイドルなんかは除くとして、学生だけだろう。

机に向かっているそいつは、長いツインテール

を両横に垂らし、頭が動いたびにゆらゆらと揺らしている。

素材が大人びているだけに、その髪型は強烈で、彼女をとて可愛い少女に引き戻しており、また、このビジネスの空間には似つかわしくない雰囲気醸し出していた。

更にその服装は、この場にありえないものだった。

中武^{いナザ}五十鈴、細くて長身のロングツインテールの彼女が着ている服は、セーラー服だった。

社長室に入って、さすがにセーラー服を着ている女の子が出てきたら驚くだろう。

すらりと長く引き締まった白い足が、短めの紺のスカートから覗いている。

いや、学校からそのまま来たんだろうが、着替えればいい話だ。

そのまま仕事するってありえないだろおい。

「あなたが衛藤祐治ね、萬院の彩加って子が言った専務ってのは」

少しきつい目が、俺を真っ直ぐ見る。

身のこなしと言い、口調や表情といい、雲英や

彩加、瑠璃那たちとは違ったタイプの美少女で、体育会系の面倒見のいい女の子、という感じに思える。

「そうだな、俺が衛藤祐治。こいつが秘書の橋高雲英だ。二人とも高校二年生だな」

「ふうん……」

値踏みような目で、俺をじろじろ見る五十鈴。「なんで高校生のあんたがここに来る事になったの?」

高校生で社長やつてるお前が言うな、と思つたが、まあ妥当な疑問だろう。

「萬院彩加は俺と同じ学校の奴で、頼まれたんだよ。それで何となく引き受けたつて感じだな」

「そう、あんたも大変ね」

「まあな」

まるで学校で話したことのない女子と話すような感じの会話だな。

「ま、同じ歳だしあたしは五十鈴つて呼んでいいわ。あんたの事も祐治つて呼んでもいい?」

「ああ、いいぜ? ここにはいない高一の瑠璃那つてこともいるが、そいつはまた紹介しよう」

「そう。で、そちらのあんたも、下の名前で呼ん

でもいい?」

五十鈴は俺の後ろにいる雲英に聞く。

「下の名前ですか。私の下はおま——ふぐうっ!」

下ネタを言おうとした雲英の鳩尾に思いつきり拳を入れた。

雲英は耐え切れず、胴をくの字に曲げてしゃがみ込む。

「え? 何よ、あんた部下に暴力振るうの? うちの会社でパワハラは——」

「いや、今のは違う! ありえないことを言おうとしたから黙らせただけだ。つて、そもそもパワハラつて権力で嫌がらせをすることで暴力でどうこうするのは違うと思うが!」

「何が違うのよ! 何でも力で解決するのはパワハラでしょうが!」

いや、それも違うと思うが、そこをツッコむ前にまずこの暴力が正当な物であると説明しないと!

「違います。これは愛です」

「お前ちよつと黙れ!」

「なんなのよあんたたち!」

「いやっ! 話せばかなり長くなるけど、こいつ

はそういう奴なんだよ！ これから長く付き合えば分かるから！」

今長々と説明するのも時間の無駄だと感じた俺は、雲英の口を塞ぎながらとりあえずの弁明をする。

「……そんなつもりないわよ」

「へ？」

五十鈴の口調が変わる。

さっきまでの少し友好的な雰囲気とその表情から消える。

「あんたたちが萬院から無理やり来たのは可哀想だと思うし、あんたたちを追い出すようなことはしない。だけど、あたしたちは萬院の助けなんて要らないわ。この会社はあたしが立て直す。あんたたちは毎日ぼーっとしていればいい。会社が建て直れば結局仕事したことになるんでしょ？」

「いや、そうだけど、それが出来てないから俺が来る事になったんだろ？」

「まだ結果が出てないだけよ！ これからは出来るわ！ あんたは何もしなくてもいいし、何もさせない！」

それは有無を言わさない口調だった。

制服の五十鈴と話していると、何だかクラスで我を通そうとする女子と学園祭の方針について喧嘩してるみたいな気分になる。

俺なんか歓迎しないって事か、ま、そりやそうか。

そんなことは分かってたけど、だとしても社長としてその態度はどうなんだよ。

俺は少しイラッとした。

「まあ、もちろん最初は様子を見るだけだがな。でも、やるときはやるぞ？ 使いたくないが強権だって使わなきゃならないかも知れない。俺は喧嘩しに来たんだ。確かにお前と仲良くすることなんてないのかもな」

俺はそう言い捨てて、まだ何か言おうとする五十鈴を無視して、社長室を去った。

「はあ、初日からやってしまったか……」

「今の喧嘩は私のせいですか……？」

雲英が遠慮がちに聞く。

「きっかけはそうだが、どうせあの態度ならいつか喧嘩になってたと思う」



元から歓迎してなかったしな。

「それはそれとして、お前は仕事の場であんな態度をするな。殴ったのは悪かったが、言葉には気を付けてくれ」

「分かりました。あと、あれはご褒美です」

「知るか」

俺たちはそんな会話をしながら専務室へと向かう。

「思ったより広いな」

専務室は、社長室に構造は準じているが、広い部屋の窓際に大きな机と椅子があり、壁に本棚、あと、応接用のテーブルとソファがある。

あと、専用秘書が二人いると連絡されているため、入り口手前に専務秘書用の机と椅子が並んでいる。

「ここが我々のオフィスラブの舞台ですか」

「違うから」

「でも、二人きりですよ？」

雲英が身体を寄せてくる。

いい匂いもする柔らかい美少女にくつつかれるのは嫌な気はしないが、しよっちゅうなのでも

う慣れた。

「そのうち瑠璃那が来るから」

瑠璃那はあの日からずっと中武建設について調査をしていて、ほとんど姿を見ない。

夜に帰って来て報告もせずに「頑張りました労って頂きたい」と言うので頭を撫でてやるくらいだ。

「とりあえず、瑠璃那が来る前に一回だけ」

雲英が窓に手を押し付けて尻をこちらに向けてる。

「やめろ。仕事中だ」

「仕事中に職場から窓の外を見ながらやるのが男のロマンだと聞きましたか？」

「誰にっ!？」

「父に」

「いい親父さんだな!」

「自慢の父です」

「皮肉なんだがなっ!」

うちの親父といい、どこもそんな奴らばっかりだな。

「あ、パンツはさつき替えたばかりですから」

「聞けよ人の話っ!」

「ふふあふい」

さすがに女の子の顔面は殴れないので、俺は口と目元を押さえて変顔にしてやった。

顔だけは可愛い女の子が、変な顔で俺を見上げている。

「ほへはひふおいふあふあふいふえ」

抵抗も何もせずそのまま喋って来るので、俺は手を離してやった。

「ふう、その手のプレイは初めてだったので戸惑いました」

「その手じゃないプレイは初めてじゃないのかよ」

「えろい本で読みまくっています」

「それだけかよ」

「私がおし、えろい本を読まなければ、祐治さんは永久に全国二位でしたよ？」

「それが分かってんならちよつと控えろ！」

「さて、中武建設の現状ですが」

「話を変えるなっ！ あ、仕事の話か」

「仕事中は仕事に集中してください」

「てめええええっ！」

「ふおふえふおふいふお」

俺は腹立ちまぎれに雲英の顔を思いつきり変顔にしてやった。

「とりあえず落ち着いて話をするか……」

何だか話が進まなかったたので、応接セットのソファに座ることにした。

「で、中武建設の現状って何だ？ っていうか横に座るな」

俺の隣でしなだれかかってくる雲英を強引に前に座らせた。

「昨日までの瑠璃那からの報告によりますと、中武建設は建築士の中武伊助が創業しました。元々は地方の土建屋でしたが、開発系建設企業として成長していきました。開発系とは、建物を建ててそれを貸し出して、安定的な黒字になると売却する企業です。建築士の利を生かして、画期的な建築デザインを売りに急成長させ、日本でも中堅建設会社となりました。その機能性を活かした上でのデザイン性に定評がありました」

「へえ、中武伊助ってのは五十鈴の何だ？」

「父です」

「親父か」

逆に言えば五十鈴はあの歳で親父がもういな

いつて事か。

「そして、順調に成長を遂げ、バブル崩壊で若干景気が下方に向いたもののすぐに建て直ししました。ですが、五年ほど前、深刻な不景気で建設業は一気に冷え込む時期がありました。その時に、萬院グループに支援を求めたのです」

五年くらい前か……確かテレビでも深刻な不景気って言うてたよな、あんまり覚えてないが。「中武建設は新株を発行し、萬院ホールディングスがその株を購入することで増資をしました。その際、五割を超える株を買ったので、中武建設は萬院グループの傘下になりました」

そうか、もともと独立した会社だったが、資金を求めて萬院の傘下に入ったって事か。

「本来なら萬院が経営に関われるため、役員を送り込みますが、萬院グループは伊助氏を信頼し、役員を送り込まずに経営を任せました結果、この不景気の中、再び成長に転じたのです」

「凄いなあ、伊助って人。五十鈴の親父さんって事は、まだそれほどの年齢じゃなかったんだろ？」

うちの親父が四十ちよっとって事は、同じ歳の五十鈴の親父も同じくらいと言っている。

そこまで会社を急成長させて、しかも不景気にも成長させるって凄いなんじゃないか？

「祐治さんは若い方がいいと思うのですか？」

「？ そりゃ、若い方がいいだろ」

何でいきなりそんな事聞くんだよこいつ。

「ほう、つまり、私よりも瑠璃那の方がいいのですね？」

「何の話だよ!？」

「祐治さんは若い方がいいと言いました。それは私より年下の瑠璃那の方がいいと言っているのも同然です」

「それは話が違うだろ! そう言うのは年齢ってよりも本人の魅力の話だ」

「では、祐治さんは——」

「遅れたでござる、専務室を探して迷っておりますそろそろ候」

その時ばたん、と入って来たのは、今話題に上っていた瑠璃那だった。

瑠璃那のスーツは雲英のようにビジネスワンピースではなく、スーツとスカートが分かれているタイプで、白いブラウスの受けから赤いネクタ

イとグレーのブレザー。

動きやすいようにチェックのフレアスカート
の丈を絞っているから、どこかの高校の制服に見
えなくはない。

そんな瑠璃那がでてて、と俺に向かって走つて
くる。

「今日も頑張ったでござる、ご褒美に撫でて頂
きたい」

「あー、分かった分かった」

俺はいつものようにそのポニーテールを撫で
てやる。

「むふふ♪」

瑠璃那は気持ちよさそうに目を細める。

「む、何ですかそのプレイ！ 私には顔を乱暴に
愛撫するプレイしかしてくれないのに！」

「色々間違ってるがツツコむのが面倒だから放
置するぞ？」

「で、どうなんですか！ 私と瑠璃那、どっちが
いいのですか？」

「何の話でござるか？ 拙者が愛人から正妻に
なる話でござるか？」

「正妻より愛人の方が愛されるものです」

「なるほど。つまり拙者が愛されているわけでご
ざるか」

「お前らちよつと黙れ。三秒以内に黙らないと痛
さ爆発でパワハラするぞ？」

俺も間違った使い方をしたがまあ意味が通れ
ばいい。

『む、ご褒美！』

二人が声を揃える。

「お前らなあ……」

俺はソファに沈み込むしかなかった。

「あーあーあーあー！」

「ぎゃーぎゃーぎゃーぎゃー」

「お前ら子供か！」

黙らないにしてももつといろいろ表現はある
だろ。

「まあ、瑠璃那も座れ。ちようど中武建設の現状
の話をしていたところだ。加われ」

「畏まったでござる」

「現状と言いなながら歴史を喋りましたけどね」

「細かい事はいい、で、現状はどうなんだ？」

「最新の情報は瑠璃那の方からお願います」

「はっ、この会社、以前は創業者の中武伊助氏が

ワンマン経営で大きくしておりました。ですから会社の体質がそもそもワンマン気質となっていてござる」

「それってどういうことだ？」

「おそらく、社長の権力が強くて他の取締役の影響力が小さいという事です」

雲英がメモをしながら補足する。

「つて事は、経営が悪化してる原因つて、あの五十鈴がワンマン経営してるからつて事か？」

「そうなりますね。経営陣はワンマンだったとはいえ、伊助氏のそばでその経営を見てきた方々です。ですが、彼女はそれを見ていません。おそらくそれでも一緒に暮らして話を聞いていた自分が一番伊助氏の方針を理解していると思ってるのでしよう」

雲英が支給されたノートパソコンを起動しながら言う。

「うーん……つまり、もう少し権限を委譲すればいいつて事か」

「もちろん役員全員が伊助氏の考えを理解しているわけではありません。委譲する相手を間違えば、これまでの経営軸を失ってしまいます。そう

なると本格的に終わりです」

「難しいな……あと、瑠璃那、仕事の話してるんだから絡んで来るな」

俺と雲英が真面目に話をしていると、話に絡めない瑠璃那が飽きたのか、俺の膝に頬をすり寄せてくる。

「む、これは失礼。すりすりしたくなる膝があったのでつい」

「それはいただけませんね。では私はそれ以上の事をしてやるのです」

ゆらりと向かいに座っていた雲英が立ち上がる。

「おい、やめる。仕事中だぞ？」

「仕事にはオフィスラブがつきものです」

「メインみたいに言うなっ！ なくても別に困らないもんだろっ！」

「それは困るのですっ！」

雲英はソファからテーブルを飛び越えて俺に――。

ガントツ！

「あつ」

雲英はテーブルを飛び越えられず、足を踏く。

「つとつ！ 危ないだろ！」

頭だけが突つ込んで来る雲英を受け止める。

「ふう……忘れていました。私はガリ勉強郎なのです……」

「……ああ、そう言えば勉強とエロ本しか見てなかったんだっけな」

「そうです。いざとなるとマグロなのです」

「それはどうでもいいが、まあ、自分の身体くらい自分で理解しておけよ？」

「自分の身体は理解しています。おへその右下がよく感じるのです」

「知るかつ！」

「あ！ 拙者はお尻のここでごさる」

「スカートめくるなっ！ ってふんどしっ!?!」

スカートをめくって白い尻を見せる瑠璃那の局部を覆っているのは、いわゆる女性用パンツじやなく、ピンク色のふんどしだった。

いや、Tバックの可能性も否定できないが、腰で巻かれている紐が確実にふんどしのそれだった。

「なんでお前ふんどし穿いてんだよっ！ 女の子だろ！」

「拙者は女である前に忍者でごさる。それにこれはバンドルショーツという、れっきとした女性用下着でごさる」

結局女なのかそれを捨てたのか、そもそも、くのいちってあれだろ？

「いや、女の忍者って色気で男を落とす……あ、ごめん」

目の前の瑠璃那は、確かに可愛いが、高一と言っても小学生のような見た目で、どう見ても男を色気で落とす人間には見えなかった。

「わ、私を侮辱したやんっ！ 落とし前を取るとねんっ！ ふんどしを取ったるわあああつ！」

「やめろおおっ！」

瑠璃那が尻を顔面に寄せて来たので押し返す。そして、ふんどしの結び目を解こうとしていたので、羽交い絞めにしてそれを止める。

「全くお前は！ って言うか、やつぱり忍者言葉嘘じゃねえか！ 興奮して地が出てたぞ？」

「ちやう！ そんなんちやうねん！ ……あ！ 違うでごさる！」

瑠璃那が興奮したまま関西弁っぽい口調でまくし立てていたが、はっと気づいたらしく、元に戻した。

「いや、もういいからさ、誰もお前にござる言葉
を強要しないから普通に話せ？」

「うう……でもでも、そうすると拙者はとても子供っぽく見られるからあかんっておとんが……」
涙目で真つ赤な顔をして俺を見上げる瑠璃那は確かに幼くてめっちゃくちゃ可愛い。

「子供か大人かはお前の成果で決まるんだよ。お前が実績を残せば誰もお前をガキだなんて思わないだろう？」

そう言いつつも俺は、子供を諭すように言い、あやすように頭を撫でていた。

「とりあえず、今は仕事 중이다。仕事しような？
見ろ、雲英はお前と一ツしか歳も違わないのに、
仕事となると……って何してんだよ雲英っ！」

俺がちらり、と雲英を見たら、雲英の野郎、スカートをまくり上げて俺に尻を見せていた。

雲英はレースをふんだんに使った青いパンツを穿いていたが、そのパンツをふんどしのように食い込ませ、その白い尻を見せつけながらテーブ

ルの上に乗って俺に寄せてきた。

「あほかああああっ！」

ぺちーん！

「あん」

俺はその尻を思いつきり引つ叩いたら、雲英は色っぽい声を上げて、向こう側のソファに倒れて行った。

尻を出したまま。

「む、ずるい！ 拙者もぺんぺんして欲しいのです！」

瑠璃那が再び尻を寄せてくる。

「お前からああああっ！」

よおし、今日はもう何もしなくてもいい！

これから説教タイムだ！

優秀な学生の
俺たちにも経営は
分からない

高校経営者ラブコメ
B6 128ページ 600円
2015年12月30日
コミックマーケット89
東ポ36b 「他人の代表」